武田家の滅亡

2019年12月9日　吉田友雅

この世の興亡は、後継者によって決まるといっても過言ではない。

次の2点から述べてみたい。

第一点目は後継者の育成であり、

第二点目はそのことによる人心の離反である。

＊ 第一の課題は後継者育成の未熟により、先人の偉大さを失うことである。

武田信玄は天正元年（1573年）53歳で病死する。そのあとを継いだのは4男の武田勝頼であり、あっけなく滅んでしまった。

用意周到な信玄が築き、鉄壁とも見えた武田家がなぜ簡単に滅びてしまったのか、歴史の大きな教訓である。その理由をいくつか挙げてみたい。

勝頼はほとんどの戦いに信玄と同行し、戦略的には一目置かれていたのである。

信玄は遺言で、「自分が死んだら3年間は喪に服せ」、「自分の言った通りにすれば、何の憂いもなくなるだろう」と勝頼に言い残した。

しかし、後継の勝頼は27歳。自己の力を過信したのか、父以上の戦いを天下に示し、功名を上げようとしたのか遺言を守らなかった。また、家臣の諫言を聞きいれなかった。信玄はまた、「無理な戦いをしてはならない」と勝頼に言い遺していた。

しかし、信玄の死は近隣の諸将の知るところとなった。勝頼は父の遺言に背き、

自ら先手をとって動き始めていた。

偉大な父信玄に対し、勝頼の末路は暗いものである。そのため、勝頼は「凡将」であると評価されることもあるが、それは異論である。

時代は天下収攬(しゅうらん)へと急速に進む時代でもあり、信玄の跡を継ぐには厳しい時代のハンディがあるのに、父との差という現実への認識が十分ではなく父と同様の存在感を周囲にまだ与えているとの思い違いをしていた。

尾張の信長に対しても同様であった。

勝頼は焦りと傲りから滅びていく。

信玄は軍議において一人の意見ではなく、幅広く家臣の意見を聞き、普段から家臣を適材適所に配置し、築城等の作戦についても複数の家臣の意見を聞いたが、勝頼は、「自分は主君であり、家臣は自分の言うことなら何でも聞く」と思い込んでいた。どれほど社会は厳しいかを知らない。また甲斐の国を守るため、また栄えさせるための真剣な思案も欠けていた。信玄は甲斐の国をどう守るか、その要素は何かを常に考え抜いていた。戦いに関しても慎重だった。敵が何を考えているか、現状をどう掴み、どう対処するか、領民の苦しみをどうすれば和らげるか思案し、作戦を練っていた。

勝頼は父親のこれらの行動をよく理解できていかった。勝頼は功名にはしり戦いを始めた。社会を軽く見、敵を軽く見た結果、後継者であるということに傲り、

自分がいかに浅はかであるかを見つめる力もなくなっていた。

武田家にはもう一つ不幸なことがあった。勝頼を勇敢に正しく諫める家臣がいなくなっていたことである。過ちや危険に対して勇敢に意見を言う、また正していくという忠義の家臣がいなくなっていた。その場しのぎの保身と、ことなかれ主義の態度が充満していたのである。

また、勝頼を囲む若い家臣は、戦国の厳しい時代を乗り越えた経験も、鍛えもなく、2世の弱さがあった。信玄のような、「家臣と共に一丸となって戦いに挑む」という伝統的な精神がなくなっていた。そんな信玄も、「我が子への偏愛」だけは克服することはできなかった。信玄自身はこの大きな失敗の結末を見ることもなくこの世を去った。いかなる名将も逃れることのできない人間性の悲劇を見る思いがする。

＊ 第二の課題は、人心の離反は一国の滅亡であるということである。

「時代」「時流」を知ることが勝利の因である。

武田家の没落を決定させたのは「長篠の戦い」である。天正3年（1575年）5月、勝頼の軍は上洛の途中に三河の国長篠で織田・徳川の連合軍と戦い、大敗した。この戦いで織田軍は、鉄砲による攻撃を巧みに行い、騎馬と長槍の武田軍を徹底的に破った。それは「時代」を先取りした織田の新戦法が、「時流」から外れ、伝統に固執した武田軍の旧戦法を破ったのである。

もう一つ注目すべき事実は、旧暦5月ということである。

5月といえば、農民にとっては1年の内で最も忙しく、重要な季節であり、この時期の争乱は農民たちの最も忌み嫌うことでであった。

信玄は民衆の「生活」と「心情」に深く細やかに配慮をめぐらし、民衆に負担をかけぬよう努力した。信玄は領民に対し、水田の引水を各村均等に行き渡るよう配分した。また大雨の時に川の氾濫を防ぐための政策(信玄堤)を実施した。また、天変地異が発生した時、年貢減免などの一時的調整を実施した。

勝頼は時の流れがあったとはいえ、農民のことを考えず行動したため、その結果武田軍に対する不平不満が募り、民衆の「心」が離反したのである。

勝頼は宝飯(ほい)郡(愛知県宝飯)の付近で豊川の用水の堰(せき)を切り平野に流した。これは、長篠に向かう徳川軍の後方をたたくためであったが、大量の水が田畑に流れ込み、甚大な被害を被ることになった。東三河の田畑の用水であったが、このためこの年は東三河の農民は旱魃に悩まされたのである。いかに軍事上の作戦とはいえ、農民の生活の基盤までも破壊した行為は、農民にとって武田軍への恨みを募らせることになった。

勝頼は民衆の「心」を知ることができなかた。苦労なしで高位にあった「権威の人」に往々にして見られることである。反対に人の「心」を知り、人情の機微に通ずることが「将に将」たる要件である。

長篠の戦いでは致命的ともいえる内部の結束の乱れがあった。武田軍の強さの

源は、「信玄」という1個人の人物の大きさにあった。それに対し、勝頼は長篠の戦いで勝つことにより、武将たちに己の手腕を見せつけようと考え焦った。

長篠の戦いに反対した武将は、馬場信春、山県昌景、武田信廉、穴山信治、内藤昌秀で、賛成したのは、跡部勝資、長坂虎房等であり、反対者が多かったのである。信玄以来の歴戦の武将たちは、織田・徳川連合軍のの兵力と陣形を見て「戦うべきではない」と決戦回避の考えで固まっていた。しかし、信玄を失った若い勝頼には焦りがあり、結束の乱れを戦いに勝利することによって力づくで補おうとした。しかしその策は裏目に出、山県昌景、内藤昌秀、原昌胤、真田信綱・昌輝などの多くの武将を亡くすことになり、絆はもろくも崩れたのである。

信玄はどこまでも兵を守り、国を守り、領民を守ることに徹していた。また、父の代に処刑された譜代の家を再興するなどし、戦国時代によくある裏切りがなかった。また退くべきときには速やかに撤退するという勇気を持っていたのである。そのことが自国の大きな繁栄につながっていた。

長篠の戦いの敗北により、勝頼の「傲り」、「焦り」による命令が増大する。その結果、人心は離れ、家臣の離反が相次ぐことになった。

天正10年(1529)1月、家臣の一人である木曾義昌は信長と通じて謀反をおこした。それだけ一人一人の心が把握されていなかったのである。小山田信茂、穴山梅雪も同じく勝頼を裏切ることになった。

小山田信茂など離反者が多くいる中で、勝頼を守ったのは高遠城の藩主、仁科盛信である。小山田信茂、仁科盛信の2名に関しては後でふれたい。

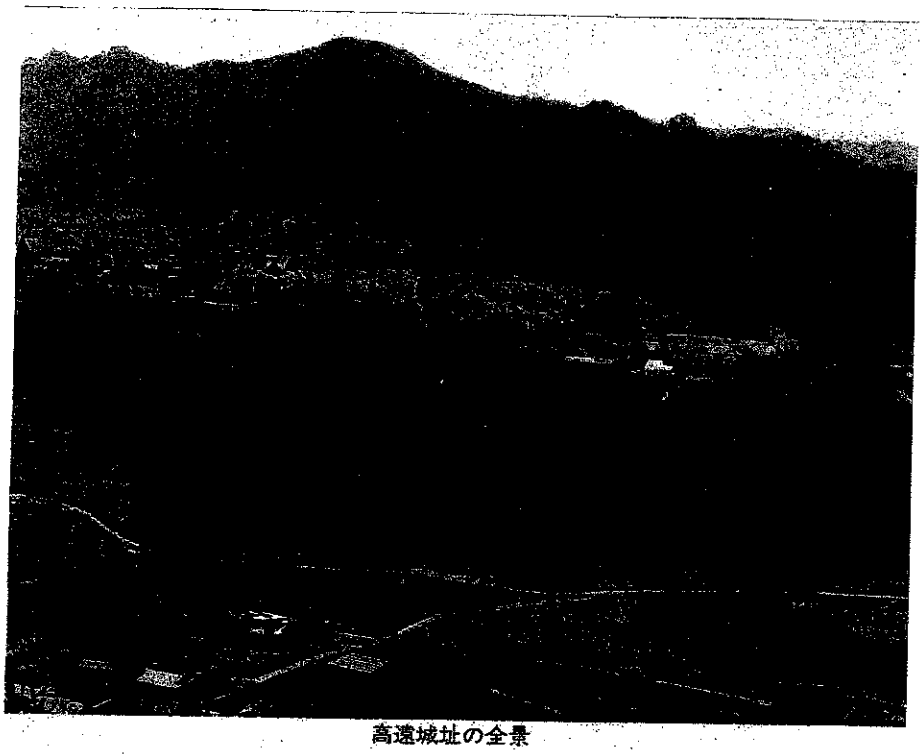
勝頼に対する信頼の欠如が、天下に名をはせた強固な武田軍を滅亡へと追い込んだのである。

最後に述べたいのは、「人心が指導者から離れてしまうと、発展はあり得ない」ということである。

これは時代を超えた方程式であり、これほど恐ろしいことはない。

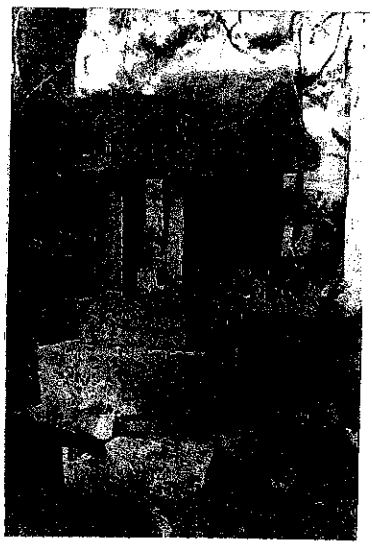
＊ 今回、高遠城、岩殿城の2か所を訪問した。

まず、初めに高遠城について触れたい。



高遠城址の全景

仁科五郎盛信



仁科五郎盛信の祠

1555年、武田氏は小笠原氏や、和久氏を撃破し、木曾氏を制圧して信濃を平定した。信濃への進出拠点として1547年に足軽大将の山本勘助や、譜代家老の秋山虎繁(信友)に大規模な改築を命じた。1556年秋山信友を城主とした。

1562年に武田勝頼が諏訪を継承し、同時に高遠城の郡司に就任する。城主の秋山信友は飯田城の城主となる。尚、この高遠城は、勝頼の嫡子信勝の誕生の地であり、信玄の父信虎の死去した城でもある。

信玄の後期の時代から、勝頼の時代にかけて、領国を接する、織田・徳川との対立の時代となる。そのため、高遠城は対織田・徳川の重要な軍事拠点となった。勝頼は長篠の戦いの敗退の後、領国に動揺が広がったため、1581年に領国を維持するため、新府城(韮崎市中田町)に府中を移転すると共に仁科盛信に高遠城を任せた。

仁科盛信は信玄の5男で、五郎晴清と言い、母は信玄の側室油川夫人で，安曇郡の仁科上野介盛政が滅びた時、清和源氏の名門仁科家が絶えることを惜しんだ信玄の命により、晴清を盛信と改名し、仁科の名跡を継いで高遠城主となった。天正10年、織田信忠が5万の大軍を率いて高遠城を囲んだとき、わずか3千の城兵で孤軍奮闘し、武士道の精華を発揮して武田氏の最期を飾ったのである。高遠城は天竜川の最大支流である三峰川と藤沢川の二つ河川の合流点に形作られている河岸段丘(かがんだんきゅう)の上にある。本丸は標高800メートルで

小高い山のように見える。西側の天然の地形を巧みに利用して三峰川の断崖を背にして本丸が置かれ、それを高低差80メートルある二の丸、三の丸が囲むという縄張りになっている。平山城とも言われている。ここは諏訪盆地と伊那谷を結ぶ杖突(つえつき)街道に面する交通の要衝であり、現在の伊奈市街地を一望できる自然を利用した難攻不落の城となっている。

盛信の年齢は、25、6歳というのが正しいようである。盛信は生まれつき聡明で文武両道に優れ、若手ながら人々にたいそう慕われていたと言われている。

天正年間には、仁科家の当主として領民のために、賦役免除や、知行安堵を実施している。

織田信長は、武田家を一挙に滅ぼすのはこの時と、自ら7万の大軍を率い、武田の親戚でありながら、武田を裏切った木曾義昌に案内させ木曾口から攻め入ってきた。伊那口からは信長の長子信忠が5万、駿河口からは徳川家康が3万、関東口からは北条氏政が3万、飛騨口からは金森五郎八が3千、都合13万3千という大軍が甲信をめがけて攻め込んできた。

それを聞いた勝頼は、自ら2万騎を指揮して諏訪郡の上原に陣を敷き、木曾口への備えとした。深志城、また下條等の険難の地に要害を築いて備え、松尾城には小笠原信嶺、飯田城には保科昌直、大島城には大島為基、信玄の弟武田逍遥見信綱には下伊那を守らせ、仁科盛信は上下伊奈郡の総帥として高遠城を

固めた。

「勇将の下に弱卒なし」の譬えにもれず、小山田信行、原正幸、渡辺金太夫、諏訪頼清・忠義等が盛信とともに籠城した。

織田信忠は、森長可、団景春とともに国境に陣を布いた。

下條等の要害は、兵士が織田方に内通して敵を引き入れて陥落し、松尾城は城主小笠原信嶺が戦わずして降参する。また、飯田城は、指揮者同士の同士討ちのため、兵士はところどころに放火をして城を捨てて逃げ去ってしまった。また、大島城の武田逍遥見は飯田城の陥落を聞き、部下を連れて逃げ出す始末であった。城主の大島為基は最後まで踏み止まり武士の面目を立てた。

下伊那の敗残兵、上伊那郡の兵士、春日城の兵達が続々と高遠城に集って来た。そしてその後逃亡していた武田逍遥見が、高遠城にきて盛信に対し、「武田の行く末をお前は見ようしているが、お前は仁科の名を継いだだけなのだから城を織田に明け渡して逃げろ」と進言した。また勝頼からは「飯田、大島その他悉く落城したその中で、城を固く守っている由、自分(勝頼)と一緒になって戦ってくれないか」と言ってきた。これに対し、盛信は「私をこの城の城主にしたのは、普段は郡中を支配し、敵から防ぐためであります。この合戦は、武田家が四面敵に囲まれ、最期を迎えようとしております。こんな時この城を明け渡しては我が武名は落ち、不外無いことと考えます。敵が攻めてきた場合は城を枕にして

討ち死にします。敵を藤沢筋には通しません。」と自筆の返書を添えて使者を帰した。勝頼はやむなく新府城に引き上げていった。

そんな時、信忠の使者として一人の僧が訪ねてきて、「勝頼が諏訪表を引き払い、また一族の大半の者も内通しているし、早速に城を明け渡してはどうか」と述べ、謀を以て城を乗っ取ろうとしたが、これに対し盛信は「無益の甘言費やさず早々に軍を寄せられよ」返答した。使者は信忠に対し「盛信の義心は到底動かすことはできません」と伝えた。再度僧が訪ねてきたが信盛は「たとえいかなる条件にせよ、勝頼と相談して駿、上、信、甲を引き取り、それ以外は一切受けぬ」と返事をし「一時の偽りなるは明白であり。汝も衣着ているからは即ち仏の弟子であり、仏の戒めの中で嘘が一番であり、高遠ほどの小城一つを攻めかねて、根も葉もないことで誑かそうとしている。その仏罰だ」と傍らにあった炉の中の焼け火箸を取って、僧の額に「信忠」と焼き印をおし、共に来た二人の従者と共に追い立てたのである。

盛信にとっては、家臣たちが「自分と共に死ぬ」という思いが消えぬうちに、一日も早く信忠の軍が攻めてくるのを待っていたとも考えられる。

信忠はこれに怒り、ただちに攻めるように指示したのである。

その頃、高遠城では「今生の別れの宴」を催し、今生の別れの盃をかわした。

天正10年3月2日に織田軍は攻撃を開始した。

城中では兵士たちが最後まで戦い、死んでいった。

まず渡辺金太夫である。

彼は元高天神城の城主小笠原の家臣で、姉川の戦いで比類なき働きをして、信長から「日本一の槍」と書いた感状をもらった男である。その後浪人となり甲州の武田家に仕え高遠城守備にあたるが、城の南、歳の神「ねのかみ」坂の守備に当たった。寄せてくる織田の兵に追われ、金太夫一人となるが、「元高天神の住人渡辺金太夫、51歳にて今討ち死にする。美濃、尾張の方は顔見知りの者もあろうから首を取り給え」と叫ぶが、一人も組み伏せようとする者もなく、大勢で遠巻きにして押し寄せてきた。金太夫は二間一尺の槍で7人を倒し、11人に傷をおわせたが、ついに力尽きるのであった。

諏訪勝右衛門の妻は、夫の討ち死にを知り、敵に向かって戦い、7、8人を打ち破ったが最後には自害して果てた。

また、仁科の「家の子」の曽根三十郎は16歳の若年ながら、弓にて敵4、5人を射ち落としたが、その場を去らず討ち死にした。

誰として逃げることなく、最後まで戦い、討ち死にしていった。

城将盛信は二間の大床に打ち登り、「新羅三郎義光の子孫・法性院信玄が5男、薩摩守仁科盛信、年26歳を以てここに自害す。汝らやがて武運尽きて腹切らん時の見本とせよ」と短刀を抜いて脇腹に突き立て、右の肋骨（ろっこつ）2、3枚かけて腹かき破り、腸をつかんで投げつけた。介錯は三十郎の父、曽根十左衛

門であった。残る人々も、互いに刺し違えて壮絶な最期を遂げた。

信忠は3月3日に甲州を進発した。その後、領内の勝間の人々がいち早く駆け付け、盛信はじめ諸士の屍を収め、三の丸の南の池で汚れを浄めて、河南村勝間の三峰川の地に葬った。後に五郎山の頂上から尾根伝いに勝間へ下る途中に5つの祠が建てられた。頂上の祠には仁科盛信が、次に小山田備中、三番目には渡辺金太夫が祭られている。

後に高遠藩主の内藤氏により、現在城跡にある、藤原神社に祭られた。

また、城跡の東、月蔵山の近くの龍沢山桂泉院に、『蒼龍院殿成嶽健功大居士』(そうりゅういんでんじょうがくけんこうだいこじ)という盛信の位牌が安置されている。

高遠城主はその後、下條氏、保科氏、毛利氏、京極氏、内藤氏と続いてきた。

特に有名な城主は保科正之である。保科正之は江戸時代前期の大名で、徳川家康の孫、秀忠の子であり、会津松平氏の初代である。信濃の国高遠藩主、出羽の国山形藩主、陸奥の国会津藩主を歴任した。3代将軍家光の異母弟で家光と家綱を補佐し、幕閣に重きをなしていたのである。日本史上屈指の名君と言われている。また、高遠藩主内藤氏が幕府に土地を返上したことにより新しい宿が甲州街道にできた。これが内藤新宿であり、現在の新宿である。

唱歌「信濃国」で

朝日将軍義仲も、仁科の五郎信頼（盛信）も

春台太宰先生も、象山佐久間先生も

皆この国ひとにして　文武の誉れたぐいなく

山とたたえて世に仰ぎ、川と流れて名は尽きず

と歌われている。

また昭和35年に、歌と踊りの「孤軍高遠城」ができた。

白井吉見に教えを受けた北原徳治が作詞し、飯田信夫が作曲しビクターレコードから発売された。

その歌詞の1番3番を紹介する。

1　きさらぎ寒き月光に、冴える雪山めぐらせて

高遠城はそびえたつ　眉あげて待つますらおに

潮とせまる　ああ織田の軍

3　雄たけびひびく幾たびか　兜はくだけ矢は尽きて

高遠城はいまほろぶ　なすべきをなし

ほほえみて炎の中　ああ腹を裂く

「孤軍高遠城」は小学校の運動会で踊っているが、

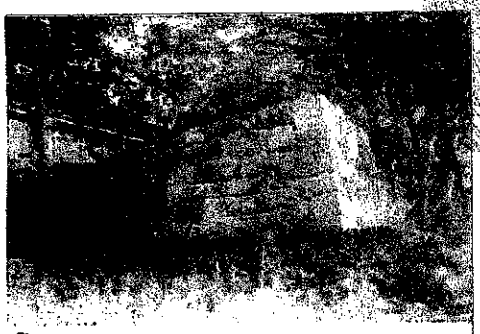
「特に高遠町が伊那市と合併当時の人口7千人が、現在5千人に減少している現実を考えると、仁科盛信の心情をこれからの世代に伝えていくことに大きな課題がある」と地域歴史研究会の会長が言っていた。

高遠町の方々は、盛信に対する尊敬の念を持ち、現在でも変わらずに誇りに思っている。

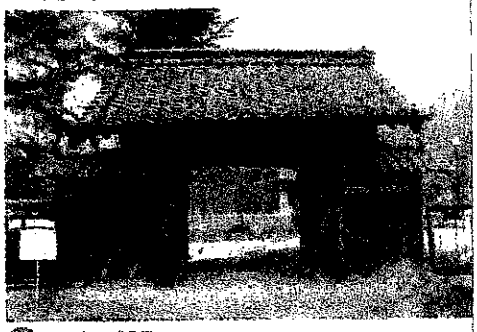
高遠城跡案内図

◀ 現在の入園ゲート
---------- 園内歩道
お手洗い
P 駐車場（観桜期のみ有料）
———— 国史跡指定範囲

大手城
❶ 大手門跡石垣
❷ 旧大手門
W.C
三ノ丸
高遠城址公園博物館
❸
鍛冶場（現在は埋立）
グランドゲート
北ゲート
W.C
二ノ丸門跡
中堀
❹
勘助曲輪
新城
諏訪神社
高遠公園博物館
内堀
天下第一の碑
本丸
❼ 太鼓橋
❻ 問屋門
三ノ丸
❸ 搦手門跡
❺
三峰川
笹曲輪
南曲輪
W.C
新子の碑
外堀
馬場先門跡
法幢院曲輪
南ゲート
外堀
W.C
信州高遠美術館
日本100名城
スタンプ設置場所
（博物館受付）
W.C
高遠町歴史博物館



❶ 大手門跡石垣
高遠城に残る唯一の石垣。



❷ 旧大手門
廃城後に城外に移築された大手門。移築の際に縮小されている。

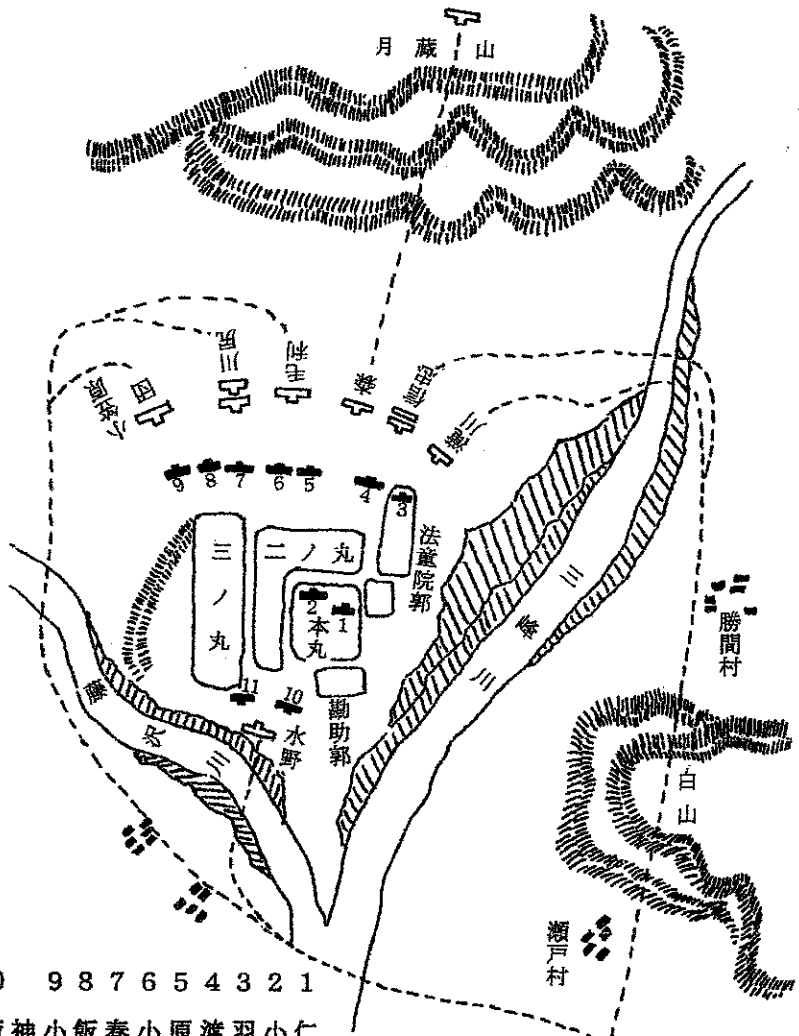
桂泉院

伊那IC上り30分
伊那市高遠町東高遠 P

眺望絶景の寺。元は高遠城内にあって法幢院といい、織田勢による落城時には法要が営まれたが、後に月蔵山麓に移され改称した。寺の梵鐘は織田信忠が高遠城を攻める際、飯田市の名刹開善寺から略奪し陣鐘として引きずってきたもので長野県宝。境内には仁科五郎盛信の位牌殿がある。

問／伊那市観光協会高遠支部
0265-94-2552

天正十年高遠城攻守両軍配置図



1 仁科五郎盛信
2 小山田備中守昌行
3 羽桐九郎治郎
4 渡辺金太夫照
5 原隼人佐昌広
6 小幡因幡守及一族
7 春日河内守正吉
8 飯島民部少輔父子
9 小山田大学助昌貞
10 神林十郎兵衛定正
諏訪勝右衛門頼清

＊ 9月に岩殿城を訪ねた。岩殿城は山梨県大月市にあり、標高634メートルの岩殿山に築かれた山城である。城主は小山田信茂で、北条家への防御拠点の一つであった。相模川系の桂川と葛野川とが合流する地点の西側に位置している。高さ150メートルの急な岸壁の上に立つ難攻不落の城である。小山田家は関東平氏(武蔵七党の秩父一族)に属した豪族である。鎌倉時代では都留郡守護とも言われた。南北時代から甲府盆地の武田氏との接触が始まった。小山田氏は裕福な豪族である。領内に関所を設け、富士信仰の道者たちから通行税を徴収して利益を上げていた。また、大月には金山があった。

信茂は小山田信有の2男として生れた。川中島合戦では弓矢を主力にして戦い活躍した。

馬場信春、山県昌景、高坂昌信等とともに「弓矢の七人衆」と呼ばれた。

また学識も豊かで文才もあり、書状・感状の代筆をしていた。「甲陽軍鑑」には「文才の必要ことは信茂を召して四書・五経を言わせて聞きたもう」と記されている。

天正9年、勝頼は木曾昌義が武田家を離反し、織田・徳川連合軍についたことを知る。また、天正10年3月高遠城の仁科盛信が破れ、武田軍は鳥居峠で大敗し、勝頼は新府城に戻る。真田昌幸が、自分の領地である上野(こうずけ)の吾妻城にて再起を図ることを提案するが拒否される。勝頼の側近は、小山田信茂の岩殿城で籠城するつもりであった。岩殿城では、勝頼について戦うか、離反するかで協議を持った。信茂は数日間悩み、郡内一円の安泰を選択し、信忠に

武田家離反を伝え、信忠はこれを受理した。信茂は自分を頼ってきた勝頼主従に鉄砲を撃ちかけて追い払った。3月11日に勝頼は織田軍の滝川一益の部隊に負け、討ち死にした。3月13日信忠から甲府・善光寺の本陣に一族郎党共に出頭を命ぜられ、3月24日に処刑された結果、「郡内領不犯」の約束を守る。

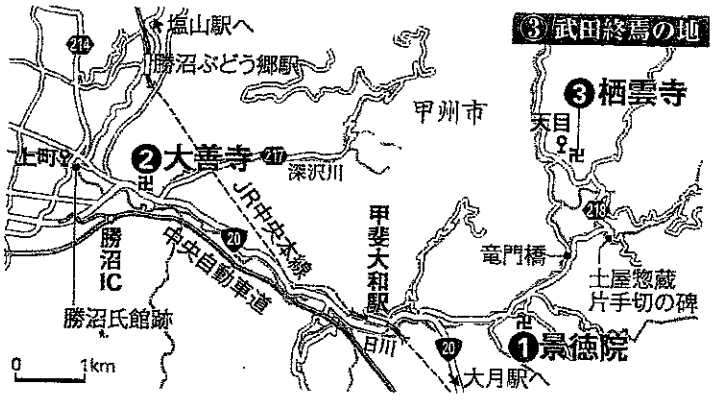
郡内には家康の家臣の鳥居元忠が入った。この鳥居元忠は、自らを犠牲にして領内を守った領主として評価されている。

＊追記　武田家終焉の故地を訪ねて、天正１０年（１５８２）２月、織田信長、徳川家康、北条氏政の連合軍の攻勢を受け、勝頼は前年に移ったばかりの新居、新府城を焼き払い、５、６００人家来とともに.岩殿城に向かうが途中で小山田茂信に裏切られ、大善寺に泊まり、先勝の祈願し、武田家菩提寺栖雲寺（天目山）に向かうのである。３月１１日、その山裾近くの日川のほとり、田野・鳥居畑で滝川一益隊に見つかり、しかし、付き従う部下は５０名弱。最後の抵抗をし、勝頼が自害する間の時間を稼ぐため織田勢と戦って奮戦した土屋惣藏（正恒）がいた。最後は討死にした。勝頼は息子信勝、北条夫人らとともに自害する。新羅三郎義光以来５００年つづいた甲斐源氏の滅亡でもあった。

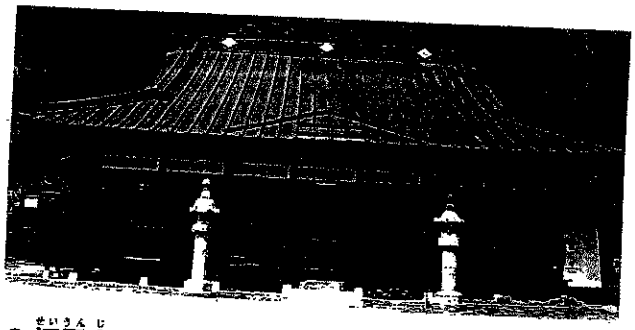
・栖雲寺　臨済宗で、勝頼の先祖武田信満の菩提寺。

・大善寺　奈良時代に行基の開創と言われているが、一方平安時代前期と言われている。また行基が夢の中で葡萄を持った釈迦如来が現れ、その如来仏像を建立したと伝えられている。葡萄寺ともいわれている。勝頼よりの一部始終を目撃した勝頼の乳母であり尼僧の理慶尼が記した「武田滅亡記」がある。

・景徳院　　曹洞宗で、天正１０年に創建。甲斐を治めて武田家の遺臣たちを召し抱えた徳川家康は勝頼らが戦死した田野郷に景徳院創建。境内には勝頼、息子の信勝、北条夫人（桂林院）の供養塔が残る。家康は無州となり緊張状態にあった甲斐国における領民の柔軟政策であったとも指摘されている。



93　栖雲寺（写真提供／甲州市観光協会）、湯村温泉（写真提供／上永哲矢）

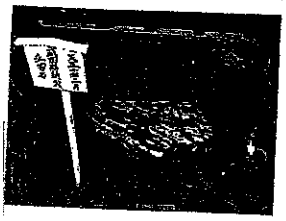


❸栖雲寺

❶景徳院

勝頼主従の墓と生害の石

墓の周りに勝頼と北条夫人らの生害石がある。自害したことを偲んで置かれたもの。



❷大善寺

土屋惣蔵片手斬りの遺跡

勝頼側近の土屋惣蔵（昌恒）が、片手で藤曼を掴み、片手で敵を斬ったとされる伝承の地。

参考資料

雑誌　「歴史人　武田家の滅亡の真実」　KKベストセラー

雑誌　「歴史人　敗者の日本史」　KKベストセラー

高遠町教育委員会　「高遠町」

講演記録集刊行会　「高遠城の攻防と一夜の城」　ほうずき書房

高遠町歴史博物館　「高遠城の戦い」

吉田龍司　武田信玄(武田三代興亡記)　しんき元社

「仁科五郎盛信ー高遠の合戦」　仁科五郎盛信400年祭り委員会

「日本100名城公式ガイドブック」　歴史群像

「郡内小山田氏武田24将の系譜　丸島和洋　戎光祥出版

「武田信玄と勝頼」　鴨川達夫　岩波書店

「長篠の戦いと武田勝頼」　平山　優　吉川弘文館

「武田勝頼試される戦国大名の器量」　丸島和洋　平凡社